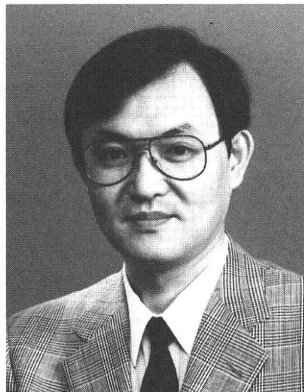


# 特別講演

## 幼小児期における機能異常の診断と矯正治療

かじ

吉野矯正歯科（東京都府中市） 吉野 成史



### 略 歴

昭和54年 東京歯科大学卒業 大学院歯科矯正学専攻  
昭和58年 東京歯科大学大学院歯科矯正学修了 歯学博士  
東京歯科大学矯正学教室助手  
昭和63年 医療法人社団矯和会 吉野矯正歯科開設  
東京歯科大学矯正学教室非常勤講師  
平成13年 日本矯正歯科学会 卒後教育委員会委員  
平成17年 日本矯正歯科学会 認定医委員会副委員長  
日本矯正歯科学会 認定医 指導医 専門医

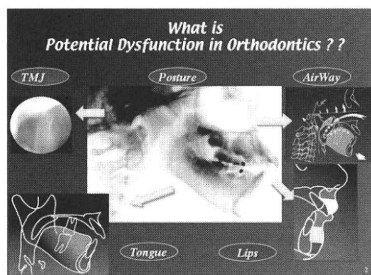
成長発育期の矯正治療を行うにあたって、潜在的な機能異常を早期に発見し、後の重篤な不正咬合の発現を未然に防止することは、治療メカニクスに優る重要項目であるものと考えられます。潜在的な機能異常としては、呼吸//嚥下、舌および口腔周囲筋の機能異常、姿勢、習癖などがあげられます。

機能異常が形態に及ぼす影響として最も典型的な例は、舌習癖、異常嚥下癖などが問題となり、舌習癖の程度や種類によって前方あるいは側方への開咬などが生じ、長期間これらが継続することにより重篤な骨格性不正咬合が生じることとなります。また、舌は口腔の中心で強大な筋層をなし、舌の位置不正や口唇、頬筋を含む口腔周囲筋の圧バランスの不均衡は、上顎歯列の狭窄や前歯の被蓋に影響をおよぼすものと考えられます。

さらに、近年アレルギー性鼻炎や慢性扁桃炎といった気道疾患を持つ患者は増加の傾向にあり、口呼吸が長期間にわたり継続すると、顎発育異常や不正咬合の発現に大きく影響を及ぼすものと言われています。このように気道疾患を伴う症例の場合、単に筋機能療法などの歯科的なアプローチだけでは改善が困難であることも多く、耳鼻咽喉科専門医とのチームアプローチが望まれます。

以上にみられるように、Mossの提唱する機能が形態を決定づけたとしたFunctional Matrixの理論は矯正臨床において随所にみることができ、これら機能異常への早期対応が治療や保定後の咬合の安定に重要であると考えます。

本学会では、下記内容につき症例を交え口述させていただきます。



1. 口唇の機能異常と歯列不正の関連について
2. Lip Pressure gaugeを用いた口唇の機能異常の評価法について
3. 舌習癖の評価と治療のプロトコルについて
4. 気道疾患が成長発育および歯列不正に及ぼす影響について
5. 気道疾患の診査、診断および治療のプロトコルについて
6. 症例報告：機能異常を伴う症例の診査、診断、治療